



していた人たち、産後に「孤育て」をしていた人たち、そして彼/彼女たちを支えるア・リトルのメンバーです。そしてこのような活動を通じて起こったこと、それは「つながりがつながりをつくる」動きです。

例えばこんな動きがありました。

- ・ 産後の家族向けの講座に参加した人が、ファミリースタートに申し込んだ。
- ・ サポーターが子育て中の方のご家庭を訪問し、おしゃべりするなかで、西宮市で活用できる様々なサポートを紹介した。
- ・ それらのサポートを使った産後の家族が今度は自分の知り合いにすすめた。
- ・ 料理講座で出会った男性同士が別の集まりにも家族で出かけるようになった。

自分の「孤育て」の苦労を他の人はしなくてすむように、とサポーター養成講座に参加した。



自宅から1.5キロ圏内でなくても、3キロくらいで「つながりがつながりを生む」、そんな動きが始まった2年目。またこれまで任意団体だったア・リトルは、2019年12月にNPO法人となりました。ムラのミライが講師をしていたコミュニケーション講座も、2020年2月には西宮での子育てサポートに使う事実質問の実践例をたくさん盛り込んで、ア・リトルのメンバーが講師を担いました。西宮市とア・リトルの協働事業「もうひとつの両親学級」も実現した2019年でした。

ア・リトルへの伴走支援も2年が過ぎました。事業名には「助け合う」という言葉が入っていますが、実は「助ける」も「助けてもらう」も両方の経験がないと、とてもハードルが高いこと、まずは「つながる」必要性に気づかされた2年目でした。そんな大きな気づきや学びを与えてもらっているのは、ア・リトルの活動に参加させてもらったおかげです。

【執筆者＝原康子 ムラのミライ研修事業チーフ】

## (2) 特定非営利活動に係る事業 ②人材育成および研修生受け入れに係る事業

### ②-1 メタファシリテーション伴走支援事業

期 間 2019年4月1日～2020年3月31日

場 所 ①東ティモール民主共和国ディリ県アタウロ郡およびメティナロ郡

②ケニア共和国ホマベイ郡ビタ準郡

協働者 ①(特活) シェア＝国際保健協力市民の会

② (特活) エイズ孤児支援NGO・PLAS

協力者 (公財) 日本国際協力財団「NPO助成 成長型事業」

事業費 3,883千円

事業の背景 (事業を始めた経緯/どんな課題があったか)

非営利団体への助成を行う日本国際協力財団が助成する事業において、「支援者と受益者」という関係性が恒常化してしまい、それが地域住民の自立や自主的な行動を阻んでしまっていることが顕著だと感じ取っていた財団の担当者が、メタファシリテーション講座を受講しました。

そして、その状態を打破し、事業実施団体が地域住民に適切な働きかけを行っていきけるようになるために、2年間のコンサルテーションを実施することになりました。

財団が助成したことのある団体あるいは助成中の団体を対象に、事業実施団体の職員およびそのカウンターパート職員に対して、国内コンサルテーションと現地研修を定期的に行っていくことで、事業期間が終わっても住民の活動が続いていくような働きかけができるようになることを目指します。

2019年度の活動内容 (何をしたか)



① シェア=国際保健協力市民の会  
(2019年4月開始)

オンライン・コンサルテーション：  
5回、現地研修：1回、国内研修：4  
日

伴走支援事業が始まった4月は、すでにシェアの東ティモールでの事業が始まっていました。まずは日本人職員(事業担当)に、メタファシリテーションの考え方と使い方についての基礎的な研修を実施しました。それ以降は、活動の過程において生じる現地カウンターパートや地域住民と駐在員とのやり取りや疑問点に基づき、コンサルテーションを行いました。



年度の前半は、調査方法や現地カウンターパートの意識改革がコンサルテーションの主なテーマとなり、8月に行った現地研修では、カウンターパートスタッフも「村での事実とは何か」について考え直す場となりました。

「住民たちのこれまでの生活や習慣を知ることが、今後の保健や予防に繋がる」という事に気づいた駐在員が中心となって、活動と並行しながら住民たちから話を聞き続け、年度後半のコ

ンサルテーションではそうしたやり取りを取り上げました。

また、コンサルテーションや現地研修の中で、「健康、予防、保健という言葉は、東ティモールの住民たちにとってどういう事なのか？健康とはどういう状態なのか？」という事に明快な答えが見出せないモヤモヤした状態が続きました。それを見つけるためにも、住民から事実（＝過去の経験）を聞き出す事が重要であるとし、日本人職員を対象に聞き出すための研修（「②-3ファシリテーター育成事業」のフィールド研修への参加および国内研修）を実施しました。



## ② エイズ孤児支援NGO・PLAS

(2019年12月開始) オンライン・コンサルテーション：2回、現地研修：0回、国内研修：4日

PLASのケニアでの事業開始は2020年春以降だったため、まずはメタファシリテーションに関する技術的な研修とコンサルテーションを集中的に行いました。事実質問の組み立て方など基礎を学んだ後、事業関係者2名が「②-3ファシリテーター育成事業」のフィールド研修に参加しました。そこでの気づきを団体内で共有し、駐在員が事業開始前に現地で行った聞き取りや今後のベースライン調査に関して、コンサルテーションを実施しました。

### 2019年度の成果（何が起こった/変わったか）

自分たちにとって当たり前なのが相手にとっても当たり前という事ではない、という風穴を開けることができました。協働団体、現地カウンターパート、住民の人たちの三者が、共通した現状認識と目標を持てるようになるための考え方や調査手法や働きかけ等を、駐在員の方々が中心になって実践していった一年でした。

<協働団体からの声>

- ・メタファシリテーションの技術は即座に定着するものではないということを理解しました（同様にメタファシリテーションによる働きかけも即座に効果が出るものではないということも）。そのため2年間という伴奏支援期間は当初長いと感じていましたが、その期間は妥当（またはそれでも短い）であったと認識するようになりました。

- ・メタファシリテーションを系統立って学ぶことができ、事実を聞くという事がどういう事か、相手に興味・関心を持って聞くとどうなるのか、というのがようやく腑に落ちました。

- ・『地域』はない、『健康』に定義はない、という事への気づきを自分たちの事業に置き換えた時、『経済的な自立』はどのような状態か、『収入向上』は住民たちにとって何なのかを考えるようになりました。

【執筆者＝前川香子 ムラのミライ海外事業チーフ】